

AXIES会長よりご挨拶

一般社団法人 大学 ICT 推進協議会 (AXIES) 会長 青木 孝文



AXIESの現在～成長するコミュニティ

一般社団法人 大学 ICT 推進協議会 (AXIES: Academic eXchange for Information Environment and Strategy) が設立されたのは、東日本大震災の直前、2011年2月です。本協議会は、高等教育機関および学術研究機関における情報通信技術 (ICT) を利用した教育・研究・経営等の高度化を図り、わが国の教育・学術研究・文化ならびに産業の発展に寄与することを目的としています。発足当初はわずか14機関だった正会員数は年々増加傾向にあります。2024年2月1日現在で、国公私立大学や共同研究機関など173機関が正会員として、また、産業界からは96団体が賛助会員として参加いただいています。一般に、他の学協会では、会員数が減少傾向にある場合も多いのですが、AXIESはこれまでコミュニティとして一貫して成長し続けてきました。

さて、最近、私たちがICTの重要性を強く再認識した出来事がコロナ危機でした。各機関において教育研究活動が継続できたのは、情報部門の皆さまの奮闘によるものです。その活動のよりどころとして、AXIESが果たした役割は大きいと確信します。コロナ危機において、ICTはまさに「変革のイネーブラー」でありました。そのコロナショックがさめやらぬまま、今まさに生成AIの大波が到来し、驚異的な勢いで社会に普及しつつあります。現在、AXIESコミュニティの皆さまには、各機関における先導役としてますます積極的な貢献を果たすことが期待されているのではないのでしょうか。

加速する世界～コロナ危機,生成AI,さらにその先へ

AIの爆発的な進化に関する問題の核心は、そのテクノロジーがもたらす未来を予測することが、専門家さえも難しいという点にあります。例えば、2023年11月に英国政府が開催した「AI安全サミット (AI Safety Summit)」では、「フロンティアAIの安全かつ責任ある開発」をテーマとして議論がなされました。英国政府

は、間もなく出現するかもしれない、非常に能力の高い汎用AIモデルを「フロンティアAI」と呼びました。そのような最先端AIが人類に与えるリスクは予測困難であるという立場から、各国政府が協力してリスクに対処する必要性を発信しました。SFの世界が現実になるかのような想定です。本サミットには中国政府も参加したことからニュースで広く報じられました。これに呼応するように、英米では世界に先駆けてAISI (AI Safety Institute) が設立され、わが国においても、本年2月14日にIPA (情報処理推進機構) のもとに日本版AISIが設置されました。

一方、経済界でも生成AI、さらにはAGI (汎用人工知能) の可能性が盛んに語られるようになりました。例えば、2024年1月に開催された世界経済フォーラム (WEF) の年次総会 (ダボス会議) では、4大テーマの一角をAIが占めました。ダボス会議のページには、32ものAI関連セッションがアーカイブされています。「生成AIは第4次産業革命の蒸気機関か」「拡大する生成モデルの宇宙」「激動世界のテクノロジー」「AI世代: 創造性にとっての恩恵か弊害か」「AI規制360度」などタイムリーなタイトルが並びます。ちなみに、個人的に注目していたYann LeCun氏のパネルでは、身体性を有するAI (Embodied AI) のインパクトや、オープンなAI開発の意義などが熱く語られました。ただし、ゴッドファーザーと言われる同氏の見解であっても、パネリスト全員の意見が必ずしも一致するわけではありません。トップレベルの専門家ですら、多様な観点や理解があり、それだけに将来予想も難しいということでしょう。

これからの私たちに求められるもの

以上のようなAIの進化は、半導体やインターネットの10倍速と言われます。この激変する世界において、日本の大学に最も欠けている要素を1つだけあげるとすると、それは“Agility”^{びんしょうせい}～敏捷性～ではないかと感じます。わが国の多くの大学では、基盤的予算が長期にわたってゆっくりと削減されてきたこともあり、労働力

がじわじわと減少する逆境に耐えながら、現場でなんとか工夫しつつ活動レベルを維持するという、守りの姿勢が浸透してしまっています。大学を縛る日本独特の規制や複雑な慣例、長期的に進行する少子化の傾向などもそのマインドセットを強化してきました。日本の大学群はどこも似たような「ゆでガエル」になってしまっているということかもしれません。一方、海外に目を転じると、素早さを武器として世界と渡り合う、実に多様な戦略をもった「跳びガエル」系の大学が躍進しています。

さて、激変する世界において、DX（デジタル変革）への取り組みは、これからの大学経営を大きく左右することは間違いありません。産業界の皆さまも交えたAXIESコミュニティの力がいよいよ試される局面です。ご参考までに図1はDX推進における“Agility”の重要性を示しています。テクノロジーの急速な進歩に対して、個人、組織、社会システムが反応する時間には、それぞれ大きなギャップがあり、そのギャップは時代とともに拡大していきます。まず、テクノロジーが最も速く進み、それに対して新サービス（例えばChatGPTなど）を通して個人の行動が追従します。少し遅れて企業や大学等の組織の事業が動き、最後に社会制度に変化していくという順序です。大学のDXでも、この時間差を意識して先回りする必要があります。組織や制度の改革を抜本的にスピードアップし、アジャイルに動き失敗から学ぶ経営へ転換していくことが最も重要ではないでしょうか。AXIESは、そのような各法人における多種多様な挑戦をタイムリーに共有し、コミュニティとしての学びを加速させるオープンな場であってほしいと考えます。

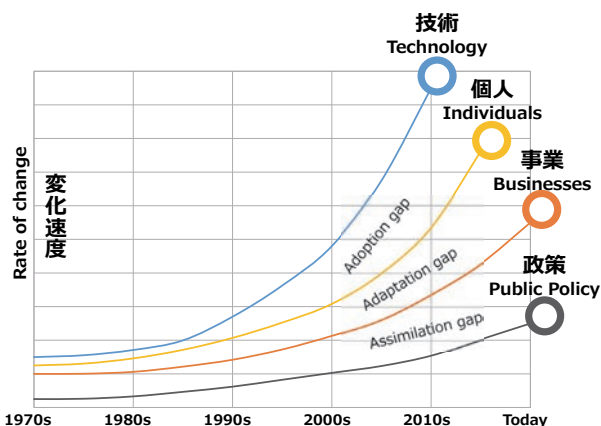


図1 DXに関する課題：技術の進化に対して、個人・事業・政策のそれぞれが対応するスピードのギャップは拡大している（文献 [1] の図を参考に一部改変）

機関誌の創刊～Trajectoryとは

さて、以上のような思いも込めつつ、このたびの機関誌の発行についてご紹介いたします。新たに創刊された機関誌のタイトルは“Trajectory”です。さまざまな組織のICT推進の「軌跡」を集め、多様な学びの共有を通して、今後の進むべき「道筋」を見だし、ともに成長していく、そのようなAXIESの役割への期待が込められています。AXIESでは、すでに専門家向け論文誌「学術情報処理研究」を刊行していますが、今回発刊するAXIES Trajectoryは、会員にとどまらず、それ以外の産業界・行政等を含む広いステークホルダーの皆さまに気軽に手にとっていただける刊行物という位置づけです。

なお、この機関誌発行に至る経緯と言いますか、それこそ“Trajectory”をたどりますと、実はAXIES設立初期にまでさかのぼるようです。安浦会長、北野会長、深澤会長と、歴代会長が構想をバトンタッチしながら、このたびの発刊にこぎつけました。

最後に、今回、企画を主導したAXIES広報委員会をはじめとして、これまでご尽力いただいた多数の皆さまに心からの感謝を申し上げ、筆を置きたいと思います。

AXIES Trajectoryは、皆さまの過去・現在・未来を繋ぐメディアです。

これから、どうぞよろしく願いいたします！

参考文献

- [1] Gerald C. Kane, Anh Nguyen Phillips, Jonathan R. Copulsky, and Garth R. Andrus, “The Technology Fallacy: How People Are the Real Key to Digital Transformation,” MIT Press (2019/4/16) .

【著者略歴】

青木 孝文

東北大学理事・副学長（企画戦略総括担当，プロボスト，CDO）。宮城県出身。東北大学大学院工学研究科博士課程修了（工学博士）。東北大学助手，助教授を経て，2002年より東北大学大学院情報科学研究科教授。2012年副学長（広報・社会連携・情報基盤担当）。2018年より現職。専門はコンピュータ工学，画像認識とAI，生体認証とセキュリティ，法歯学と個人識別など。